面瀬さがし　二

「面瀬川名・一考」

「松岩百話集」「松岩郷土誌〈牧野珪舟・編〉」
「上沢自治会三〇周年記念誌・三〇年のあゆみ」
「鮎貝家所蔵・松崎絵図」から

歴史的文献には、よく誤解と誤認識による記述が見られる。また、後世の歴史家、郷土史家による発見や類推、新説は、さらに歴史的真実や事実にベールをうわのせしている感もなきにしもあらずである。一度、平成二十四年の面瀬小・校長室だよりに「面瀬」地名由来が掲載されたが、その後由来に諸説があり、しかも江戸期に面瀬川は領主の鮎貝氏によって川筋を変更され現在に至っているという事実を知るに及び、開校三〇周年にあたり、面瀬川名に関するさまざまなことについて再掲し、知り得た説を紹介したい考えた。

平成二十五年三月、元気仙沼市議会議長の尾形桃太郎氏がご来校され旧松岩、階上地の現在の面瀬地区部分についての歴史的なことについて伺うことができた。そのお話の中で、面瀬川の流路についてのことが話題にのぼった。江戸期の鮎貝氏の面瀬川流路変更普請前の川筋はいったいどのように流れていたのか。そして、なぜ流路を現在の流れに変更しなければならなかったのか、実に興味がわくところではある。

尾形氏によれば、面瀬川の流路は現在の川北から見ると「高谷」、川南から見ると「馬場」の中間点付近から南東に流れ、震災被害激しかった尾崎地区の「川尻」域を通り、気仙沼湾の千岩田分の「洞尻」域から海に流れ込んでいたという。このことは数人の尾崎地区在住経験の方々からも伺った。では、なぜ鮎貝氏は現在の川筋に変更したのであろうか。ここに、有名な階上地区（正確には旧階上地の岩月千岩田地区）と松岩地区（正確には旧松崎村の面瀬川流域）の鮭漁をめぐっての争いがあったことを認識しなくてはならない。鮭が産卵のために旧面瀬川を河口（千岩田分）から入り登り、中流域、上流域（松崎村分）に海の幸をもたら

すのだが、千岩田の人々は、大量の鮭を河口域でほとんど漁獲するために、産卵孵化の松崎村にはその幸をもたらすことが少なかった。鮭のもと、つまり卵と稚魚は上流の松崎で、その成魚は河口で千岩田が一網打尽とは、確かに理不尽な話ではある。そのような両村のいさかいを踏まえたものなのか、そうでないのか今となっては不明だが、「松岩郷土誌・略年表」に江戸期、延宝六年（一六七八年）「鮎貝氏、赤岩海面十町、松崎、田五町八反　尾崎、田八反畑三町の埋め立て検地。この際面瀬川河口を岩月から片浜に移す」とある。ただし、疑問符がついているので編者の牧野氏は正確性に疑念があったようだ。それにしても間違いなく面瀬川は高谷、馬場付近から気仙沼湾に直行している。この干拓事業は、きっと鮭にまつわる両村のいさかいを解決するための川筋変更ではなく、田畑を効果的に利活用するには、面瀬川を直行させて両岸の田畑に水をもたらすためのものであろうと考える。

さて、面瀬川名についても諸説ある。古来、金の産出地である流域には傾城がいた。徳川家康の「産金奨励十五箇条」には産金地には傾城を

置くようにとあるそうだ。傾城（けいせい）がいて、川名を傾城川（けいせい・かわ）として、その発音変化で面瀬川（おもせがわ）となったというのが一般である。しかし、諸説には一つとして川名のこと。二つには川筋のことが確定しないことが見受けられる。

まず、川名については、「傾城」由来のことを述べた。単純に考えて産金が盛んな地は全国にあり、そこにも傾城はいたはずである。であれば面瀬川はなくても、傾城川、傾城山などの傾城を冠にした地名はあっものと思う。ところが「傾城川」地名は福島県の田村市の地域名、「傾城山」はなくて「傾城森」は宮城県の白石市の標高四百四十メートルの山名が全国にあるだけである。地元郷土史家によると「傾城」由来ではないという。それは、時代をさかのぼって多賀城に国府が置かれていたころ、大和朝廷の支配権が徐々に東北地方を北上していったころである。多賀城国府は蝦夷を追い込んでいったものの先住民はなかなか手強いものである。丁度この面瀬川が一時的に国府側と蝦夷との領域の境になった時に、この川の南は国府領となったので「面」。川の北は蝦夷地なの

で「背」として「面背」川と名したというのである。

現在の気仙沼市の松岩地区は昭和二十八年の市町村大合併で組み入れられたが、松岩地区前身の松岩村は明治八年（一八七五年）の松崎村と赤岩村の合併による。この松岩村の地図には現在の面瀬川を中瀬川と記入している。また、旧東浜街道（国道四十五号とほぼ一致）の現面瀬川に架かる橋を中瀬橋と記入している。つまり明治初期は面瀬川は中瀬川と名付けられていたのかという疑問がもちあがる。

古地図（郷土史家の小野寺昭英氏から提供されたもの（複写））で江

▲明治松岩村地図▲

戸期の「松崎村絵図」（面瀬川が直行しているので延宝以降のものらしく、また鮎貝家の松崎絵図にある「鮎貝伊織様御自分山」との記入もあるので、その写しとも考えられる。）には、現在の中瀬川が傾城川と名されこれは八幡神社から松岩小学校のある五駄鱈の丘陵の西の田地を流れる川であり、現面瀬川を傾城川由来としていることに違背する。

「松岩百話集」の及川起雄氏の「傾城川」によると、現面瀬川は上流を産金由来の「金取川」、中流域を傾城川もしくは「気仙川」といい、下流域河口付近を尾崎川といっていたとある。気仙川とは同じく震災で被災甚大だった岩手県住田町、陸前高田市を流れる釣り師の垂涎の的の

▲小野寺昭英氏から提供▲

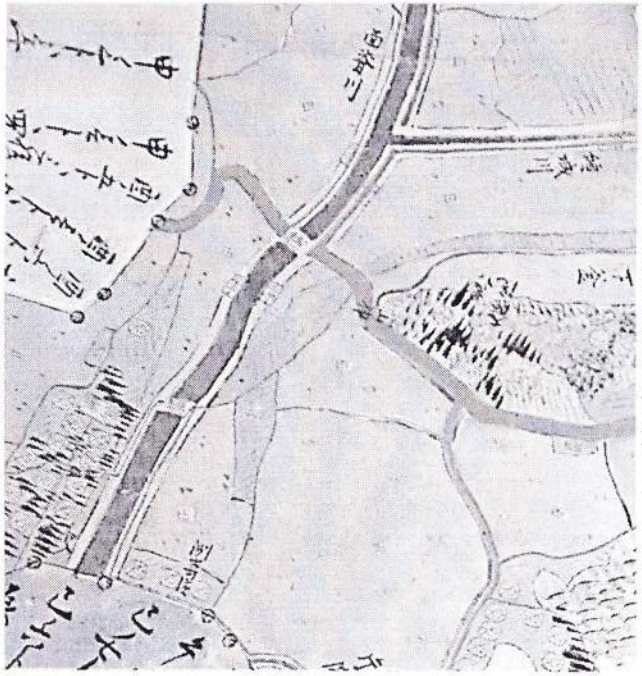
全国的に有名な気仙川が思い起こされる。では、なぜ面瀬川中流域を気仙川といったか。及川氏は「傾城」の文字や意味を知らない里人が言語音から「けせん」と言ったものとお考えのようである。

四月二十七日、以前から是非拝見したかった鮎貝家に伝わる「松崎絵図」を鮎貝文子様（前・気仙沼市教育委員）のおはからいでお見せいただいた。絵図面には今の面瀬川を面背川と記述されおり、現中瀬川を傾城川と記していた。この絵図には今の松崎片浜の山地と松崎北沢一部を「鮎貝伊織様御自分山」とありこの絵図は、当然松崎

▲松崎絵図▲
（鮎貝家所蔵）

▲御自分山▲
（鮎貝家所蔵）

村を領地とした鮎貝伊織（鮎貝家第十代当主；一七七四年生～（安永期）の時代に作製された物であり江戸中期のものである。つまり江戸中期には現面瀬川は面背川と表記され、現中瀬川は傾城川と呼んだことがわかる。このことは小野寺昭英氏提供の古地図と照合する。もう一つ言えることは「面背」ということだ。つまりこの川を多賀城政庁時代の版図の境目と考える説の若干の裏付けになる。「面」は大和政権領地、「背」は蝦夷の領地とも言えまいか。ただ江戸期の絵地図なので奈良時代の漢字表記がそのまま千年続いていたかは疑問がある。



▲面背川と傾城川▲（鮎貝家所蔵）

蛇足だが現在の中瀬川は「うじいえの川」と昔言ったと尾崎に関する取材に訪れた小野寺憲雄氏がお話されていたことを、後世の何かの地史研究の参考になればと加えておく。ただし、江戸期仙台藩の知行内の事情を書き留めた「安永風土記」の「松崎邑（むら）」では、松崎村には二つの川があり一つが赤柴山（現上沢地区内）を源流とする宇奈多川（現中瀬川と思われる）があり、「傾城川」に合流するとある。宇奈多川が「うじいえの川」となる音変換するとは「う」だけは納得するが、あとは不明だ。

さて、何はともあれ面瀬川名由来は掘り下げるほど地域の歴史文化とまつわって非常に興味のわくこととはいえまいか。